博士学位論文審査要旨

２０２０年1月７日

論 文 題 目：
20 世紀初頭イラクのユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの諸相
―ユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』（1924-1929）を中心に―
学位申請者：　天野　優
審 査 委 員：
主　査：　神学研究科　教授　　アダ・タガー・コヘン
副　査：　神学研究科　教授　　森山　央朗
副　査：　神学部　　准教授　勝又　悦子

要　　旨：
本論文は、1920 年代から 30 年代にかけてバグダードで活躍したユダヤ・エリートたちに焦点を当てる。オスマン帝国末期からイギリス委任統治を経て国民国家イラクが形成されていくこの時代、近代化の中で世俗的な高等教育を受けたユダヤ人たちは新たな知識エリート階級を形成し、イラク国民エリートの一部たることを希求した。本論文は、そうしたユダヤ・エリートのアイデンティティ複合がどのようなものであったのかという問題設定の下で、彼らの思想と運動を、彼らが創刊・編集・出版した文学雑誌『ミスバーフ』（1924-1929 年発行）の分析を中心に論究する。

第 1 章は、イラク近代史を概観し、アラビア語がイラクの国民意識の形成に中心的な役割を果たすとともに、ユダヤ・エリートをそこに参与せしめる上でも重要であったことを指摘する。第 2 章は、雑誌『ミスバーフ』の概要を整理する。『ミスバーフ』は文語アラビア語を用いることで、ユダヤ人だけでなくムスリムたちも読者として惹きつけようとした。第 3 章は、『ミスバーフ』の記事の分析を通して、イラクのユダヤ人とシオニズムの関係を解明する。第 4 章は、ナフダ（アラブ文化復興運動）に対する『ミスバーフ』の関与を論ずる。『ミスバーフ』の文芸活動に関する記事からは、同誌がユダヤ啓蒙主義とナフダをつなごうと試みたことが読み取れるという。

本論文は、国民国家イラクの形成期に文学や教育の分野で活躍したユダヤ・エリートたちの活動を分析し、彼らのアイデンティティを「ユダヤ人であること」と「イラク人であること」の間で揺れ動く可変的なものとして考察する。彼らが文語アラビア語と現代ヘブライ語を巧みに使い分けたことは、複数のアイデンティティが彼らのなかで様々に相対していたことを反映していたのである。

本論文は、20 世紀前半のイラクにおけるユダヤ社会についての本邦初の論考であり、国民国家イラクの形成とそれがユダヤ・コミュニティにもたらした影響について新たな知見を提供するものである。ここで提供される新たな知見は、ユダヤ人の近現代史の理解に重要な貢献をなすものであり、アラビア語とヘブライ語の資料を浩瀚に渉猟することで、日本のユダヤ研究・中東研究の進展にも大きく裨益するものである。

よって、本論文は、博士（一神教研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０２０年1月7日

論 文 題 目：
20 世紀初頭イラクのユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの諸相
―ユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』（1924-1929）を中心に―
学位申請者：　天野　優
審 査 委 員：
主　査：　神学研究科　教授　　アダ・タガー・コヘン
副　査：　神学研究科　教授　　森山　央朗
副　査：　神学部　　准教授　勝又　悦子

要　　旨：
天野優氏は、2016 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たし、このたび学位論文を提出した。2019 年 12 月 17 日(火) 13 時より 2 時間、神学館会議室において総合試験を実施し、天野優氏から 20 世紀前半のイラクにおけるユダヤ・コミュニティの歴史的政治的背景、ならびに関連領域について十分な素養を有することを確認した。本論文で駆使された文献類を見ても明らかなように、現代ヘブライ語、英語、さらにアラビア語の高度な能力を有している。
よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：

20 世紀初頭イラクのユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの諸相
—ユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ』(1924-1929) を中心に—

氏　　名：　天野　優

要　　旨：

本論文は、20 世紀初頭イラクにおけるユダヤ・コミュニティとそのアイデンティティの一端を明らかにすることを目的としている。「ユダヤ人とは何か」「誰がユダヤ人か」という問いに、今日に至るまで多様な解釈が提示されてきた。普遍的な性質「ユダヤ」を有する「ユダヤ人／教徒」という集団が存在するのかというこの問いに、本論文は一つの例を提示する。

シオニズムとアラブ民族主義という二つのナショナリズムが交差する 1920 年代イラクのユダヤ・コミュニティでは、ユダヤ教／ユダヤ民族／シオニズムが拮抗関係にあり、また一部のユダヤ人は、アラビア語を話しアラブ世界に生きる「アラブ人」であり、近代国民国家イラクの「イラク人」であることを自負していた。本論文はそうした 1920 年代イラクのユダヤ系知識人によるアラビア語誌『ミスバーフ (המנורה/المصباح)』(1924-1929) を分析の中心に据え、ユダヤ世界／アラブ世界双方の文脈を鑑み考察することで、1920 年代イラクにおけるユダヤ人のアイデンティティの諸相と変容の背景を明らかにするものである。本論文は大きく二つの部分によって構成される。ユダヤ系知識人と『ミスバーフ』が置かれていた歴史的／社会的文脈を考察する第 1 章と第 2 章、および『ミスバーフ』誌面に見られる相反する性質に着目しその記事を分析する第 3 章と第 4 章である。

第 1 章は、1920 年代のイラクとそのユダヤ・コミュニティの歴史的／社会的背景に関する章である。ここでは、アラブ世界とユダヤ世界という、隣接しつつも独立した枠組みを持つ二つの世界、それぞれに見られた西洋との邂逅および近代化／世俗化の過程に着目する。イラクは、数世紀にわたりオスマン帝国の属州であったが、帝国崩壊後 1921 年の英国委任統治開始とイラク王国の成立により近代国民国家としての道を歩み始める。本章ではまず、イラク社会全体におけるナショナリズムの興隆および集合的アイデンティティや国民意識の変化に焦点を当て、イラクにおいてユダヤ系知識人の活躍の機会が増大した背景に、多種多様な宗教／宗派／民族が入り組んだイラク社会特有のナショナリズムの潮流とより開かれたアラビア語言論空間の形成があったことを指摘した。

また、同時期のイラクにおいてユダヤ・コミュニティが独自に経験した、ユダヤ世界との接触に起因する発展にも焦点を当てた。イラクのユダヤ・コミュニティ内で、周辺のムスリム人口に比べ早い段階から西洋式の世俗教育や近代技術の導入が進んだ背景には、ヨーロッパの諸ユダヤ・コミュニティとの間に恒常的な関係性が維持されていたこと、およびユダヤ・コミュニティ内における宗教的権威の立場の変化が影響を及ぼしていたことを考察した。

上述のようなユダヤ・コミュニティ内外の変容を概観した上で本章では、イラク社会とそのユダヤ・コミュニティ双方における定期刊行物の印刷・出版の発展を辿った。特にユダヤ・コミュニティにおける新聞・雑誌の普及過程では、イギリスからインドに広がるバグダード出身ユダヤ人の商業ネットワークが大きな役割を果たしており、周辺のアラブ的ムスリム社会とは極めて異なる動機と経緯を有していたという点を指摘した。

続く第2章では、イラク社会とそのユダヤ・コミュニティ、双方が独立して辿った発展と変容の過程が交差する時期に創刊されたアラビア語誌『ミスバーフ』の位置付けを試み、特にその性質をめぐる先行研究の評価を考察した。「文学的、社会的、学問的週刊雑誌」を標榜する『ミスバーフ』は、イラクのユダヤ系知識人による初めての本格的なアラビア語誌であった。イラク国内外のユダヤ・コミュニティに関するニュースや、アラブ文学、当時イラクの知識人一般に共有されていた社会問題を論じる社説など、『ミスバーフ』の記事の関心はアラブ世界とユダヤ世界双方へと向けられていた。主な寄稿者には、その所有者でシオニスト組織と近い関係を維持しつつイラクの国会議員も務めたサルマーン・シーナ（1899-1978, سلمان شينة, סלמאן שינה）や初期の編集者でアラビア語詩を始めとする文学作品を多く寄稿したアンワル・シャーウール（أنور شاؤول, אנואר 1904-1984, שאול年）、ユダヤ教の伝統や現代ヘブライ語にも造詣の深いエズラ・ハッダード（عزرا حداد, עזרא חדד, 1903-1972）などがいた。

1950 年代にイラクのユダヤ人口のほとんどがイスラエルへ移住して以降展開されたイラクのユダヤ・コミュニティを扱う研究では、その歴史をどのように叙述するかが争点であり『ミスバーフ』に関しても例外ではない。本章では「過激なアラブ民族主義者に対する、ユダヤ・コミュニティの表現手段」、「シオニスト的」、「アラブ文化の展望を共有する場」といった、先行研究における多様な『ミスバーフ』評価と歴史叙述との関係性を整理し、その問題点を明示した。

第3章では、20 世紀を迎えた宗教集団「ユダヤ教徒」がより世俗的な意味合いを持つ「ユダヤ民族」へと変容する過程に、どのようにシオニズムが介入したのか、またその変容過程がどのように『ミスバーフ』の誌面に表出するのか、という点を論じた。まずイラクのユダヤ・コミュニティとパレスチナ（ארץ-ישראל, イスラエルの地）の関係性が 1920 年代を転換点にどのような質的変化を遂げたのかという点に着目し、近代以前は宗教的寄付金の集金を担うラビらによる「ラビ使節」によって構成されていたパレスチナのユダヤ・コミュニティからの往来が、1920 年代以降「シオニスト使節」へと取って代わられたことを踏まえ、それによってイラクのユダヤ・コミュニティにもたらされた変化を論じた。

また本章では、1920 年代以降の「シオニスト使節」と親交を深めた人物であり、イラクにおけるヘブライ語教育の第一人者であるアハロン・サッソン（1872-1962, אהרון ששון年）と、彼が設立した「ユダヤ文学協会（الجمعية الأدبية الاسرائيلية/ האגודה הספרותית העברית）」の背景を概観し、とりわけ、ヘブライ語とその文学・文化の普及を目的に設立されたこの協会が 1924 年以降はアラビア語誌である『ミスバーフ』と関わりを持つようになった経緯を考察した。また、第2章で言及した先行研究が指摘する「対抗言説を提示するためのユダヤ・コミュニティの表現手段」としての『ミスバーフ』の一側面が反映されている記事として、パレスチナとの関係性を象徴しているヘブライ大学設立に関する記事、アラブ世界における反ユダヤ主義的言説を批判する記事、そしてイラクのユダヤ・コミュニティ内部を統べていた諸制度への批判および対立に関する記事を取り上げ分析した。

第4章ではアラブ文化復興運動（النهضة, ナフダ）という文脈における『ミスバーフ』を論じた。政治・思想運動としてのアラブ民族主義の前哨とされてきたナフダであるが、近年その文化・文学的側面が再評価されている。こうした先行研究の傾向に基づき、本章はまずイラクのユダヤ系知識人が、ヨーロッパに端を発するヘブライ語を用いた文化復興運動ハスカラ（השכלה）とアラブ世界のナフダ、双方に位置付けられるということを指摘した。その後『ミスバーフ』誌面に見られるユダヤ系知識人の「ナフダ」理解、特にその潮流内に自らをどのように位置づけていたのかという点に着目し、レバノンのベイルート・アメリカン大学に留学していたイラクの一ユダヤ人による報告記事に焦点を当て論じた。また国内外のアラビア語新聞・雑誌への言及を取り上げ、『ミスバーフ』がアラビア語言論の場で自らをどう位置付けていたのかを明らかにした。

『ミスバーフ』誌面には、多様な文学的試みも見られる。アラブ文学の主流は長きにわたり詩文学であったが、近代ヨーロッパ文学との邂逅により新たなジャンルが生じた。具体的には、韻

律に囚われない自由詩、短編小説、そして演劇の三つである。古典アラブ文学の伝統を継ぐ詩はイスラーム的過去との繋がりを、社会問題を取り上げる短編小説はイラク社会の現実への貢献を、そして見る者と演じる者が生じる演劇は公共空間の変化を象徴しているという先行研究の指摘を前提とし、本章は『ミスバーフ』誌面にこれら三つの新しいジャンルがどのように表出するのかを考察し、「アラブ文化の展望を共有する場」としての『ミスバーフ』の一側面を明らかにすることを試みた。

結では、1929年、廃刊間際の『ミスバーフ』誌面に見られたユダヤ・コミュニティ内部の対立に関する記事を中心に、この対立がユダヤ教／ユダヤ民族／シオニズムという三つの要素の拮抗の一つの帰結であるという点を指摘した。加えて、第3章と第4章を通したユダヤ世界／アラブ世界双方との繋がりを象徴する記事の分析を鑑み、『ミスバーフ』の誌面に成立し得たユダヤ世界／アラブ世界双方に広がる関心は、当時ユダヤ系知識人が表象したアイデンティティの多様性の反映であることを示した。また、シオニスト的意図を持つ「ユダヤ文学協会」のアラブ文化興隆への貢献など、一見相反する二つの要素が同一誌面に共存しえた背景には、当時のユダヤ系知識人らのアイデンティティの根底に「東洋（מזרח/الشرق, the East）」に属しているという認識があったという点を指摘した。イスラエル建国前1920年代イラクにおけるユダヤ人は、シオニズムと接触しながらもそれを内面化してイスラエルへと移住を試みることはなかった。またアラブ民族主義を受け入れイラク社会に完全に同化することもなかった。こうした後にパレスチナ情勢の変動に伴い大きな政治的潮流に取り込まれていくこととなる、1920年代にのみ成立しえた彼らの相反する性質を持つアイデンティティの多様性と可能性が、『ミスバーフ』誌面に文学的・文化的広がりとして表象されているのである。